

第3章 不登校実態調査で得た結果

不登校を経験した区立中学校卒業生やフリースクール等を対象に実施した不登校実態調査（令和3～4年度実施）では、主に以下の結果を得ることができました（枠内は調査結果のポイント）。

1 当事者（児童生徒・保護者）の視点

(1) 不登校のきっかけとして、本人・保護者の8割以上が学校生活に要因があると感じている。

- ・不登校のきっかけとして、本人・保護者の87.3%が、学校やクラスの雰囲気、いじめ・嫌がらせ、先生のことなど、学校生活のことを選択
- ・「人間関係や学校・クラスの雰囲気」に関して、進学した際の環境や友人関係の変化等が関係

(2) 学習面で不安を抱えていた生徒が7割、進学や学習面での手助けを必要としていた生徒が5割であった。保護者自身も本人と同様に戸惑い、様々な不安を抱えている。

- ・生徒の73.4%は「進路・進学」、69.2%は「勉強の遅れ」に不安を抱えている。
- ・必要な手助けは、「進学」（47.3%）、「学校の勉強」（44.7%）に関する割合が高い。
- ・保護者が子どものことについて誰かに相談できたり、手助けがあればいいのと思うこととして、「進学」（38.3%）や「仕事につくこと」（34.5%）、「心の悩みを相談する場所」（32.0%）に関する割合が高い。

(3) 進学先は定時制と通信制高校が主流。進学後に生活改善した生徒が8割であった。

- ・進学先は、全日制 16.0%、定時制 38.8%、通信制 35.6%
- ・不登校時に比べて、現在の生活が「良くなった」が78.8%

(4) 卒業後にも相談や手助けを必要としていた生徒が5割であった。

- ・中学校を卒業してから相談したい・手助けが欲しいと思ったことが「ある」が46.2%
- ・これからの生活についての不安は、「就職」（46.8%）、「気分や体調・健康」（42.6%）、「進学」（42.0%）に関する割合が高い。

(5) ICT 機器を使った学習に一定の効果がある。

- ・ICT 機器を活用した学習の「経験あり」が53.9%。使ってみてよかった点として、「自分のペースでできる」、「繰り返しできる」、「人目を気にしなくてよい」などの意見がある。

(6) これまで区が実施してきた取組には一定の評価がある。

- ・教育相談事業を利用した生徒の86.5%が、「(どちらかといえば) よかった」と評価
- ・スクールカウンセラー・心のふれあい相談員を利用した生徒の74.7%、スクールソーシャルワーカーを利用した生徒の77.8%が、「(どちらかといえば) よかった」と評価
- ・保健室や相談室等を活用した校内居場所（別室登校）を利用した生徒の67.7%が、「(どちらかといえば) よかった」と評価
- ・適応指導教室事業を61.5%の生徒が利用し、勉強や相談等ができたと評価。利用しなかった生徒の42.4%が、「本人が行きたがらなかった」と回答
- ・居場所支援事業を利用した生徒の80%が、「(どちらかといえば) よかった」と評価

2 支援者（学校・フリースクール）の視点

(1) 8割の教員は不登校児童生徒の対応経験があり、7割の学校は校内研修を実施している。研修未実施の学校は、時間の確保が困難なことが主な理由

- ・79.6%の学校が、不登校児童生徒の支援を目的とした会議を定期的開催。83.8%の教員が、不登校児童生徒の対応経験を有する。
- ・小学校の73.8%、中学校の63.6%で不登校児童生徒の対応に係る校内研修を実施。実施していない学校は「時間の確保が困難」が主な理由

(2) 不登校の対応で必要と思う内容が、小学校と中学校では異なっている。対応する教員は、時間の確保に課題

- ・中・長期化した不登校児童生徒に必要と思う対応として、中学校では、小学校と比べて「家庭訪問」「スクールソーシャルワーカーによる支援」「適応指導教室などの利用」の回答割合が高く、小学校では、中学校に比べて、「オンライン授業」の回答割合が高い。
- ・教員の77.9%は、不登校児童生徒に対応する「時間の確保」が課題と捉えている。

(3) 多様なフリースクールがあり、練馬区の児童生徒37人が利用。フリースクールからは、学校との情報共有や情報交換を望む声が多い。

- ・フリースクールが特に力を入れている内容としては、「独自の理念や方針による特色ある教育活動」「学力に対する支援」「学校以外の居場所対応」が多い。
- ・学校や行政と連携を進める上で必要だと思う取組としては、学校現場とのより積極的な情報共有・情報交換を望む声が多い。

不登校を経験した卒業生へのインタビューにおける主な意見

学校を休み始めたときのきっかけや理由

- ・クラスになじめず孤立してしまい、学校に行きたくなくなった。小学校からの友達が、中学校で新しい友人と仲良くしている姿に、強い不安感を覚えた。
- ・昼夜逆転しており、睡眠時間が3時間くらいになってしまった。明確にこれが嫌だということではなく、学校に行くと体調が悪くなった。
- ・別の小学校からきたクラスメイトにいじられるのが嫌だった。それが原因で、夏休み明けに戻るの嫌になって不登校になった。

学校を休んでいたときの状況、困っていたことなど

- ・最初のころは部屋に閉じこもったままゲーム等をずっとしていた。昼夜逆転もあった。
- ・勉強ができず、進路をどうしようかというぼんやりとした不安があった。学校には行きたくないけれど、でも行かないと授業等を受けられないというジレンマがあった。
- ・いろいろな人が心配してくれたが、逆に放っておいてほしいという気持ちが強かった。
- ・先生から勧められて、一度学校に戻ったが、休んでいた間の勉強が全然追い付かず、負い目を感じ、みんながどう思っているんだろうと考え、また行けなくなった。